本実践・研究から見えてくること

研究協力者 佐々木 雅子
（秋田大学教育文化学部 英語・理数教育講座）

聞き手のニーズを生かして主体的に学ぶ

外国語習得に「学びのものさし」を入れることは、難しいことは確かである。しかしながら、意思伝達のコミュニケーションを外国語で行うには、自分の学習に責任を持ち主体性を持って取り組んでいくことが必要である。問題は、何について、どの段階で、どのように「学びのものさし」を使うかということである。

オープン研修会での藤田峻教諭による6年C組の授業では、「学びのものさし＝聞き手のニーズに応じて詳しく伝えるための視点」とし、夏休みの思い出の伝え合いを豊かに行うものであった。

◆成果について◆

第一の成果は、課題設定による動機付けである。「1番の夏の思い出について、質問をしたり答えたりしてやり取りを広げよう！」は、6年間の英語の知識や技能を総合的に用いる課題となっていた。教科書を基本にしながら、児童が表現したいと思う内容をふくらませ、教科書にはない表現も加えながら、本当に自分が伝えたいことを伝えることのできる活動となっていた。学習者自身が学びのものさしを使うためには、活動に積極的かつ主体的になっていることが前提条件である。自己表現したい、より高みを目指したいという気持ちを生み出すことに成功していたと思われる。このように、課題設定がうまくいくと、児童の言語使用が湧き水のごとく流れてくる。英語を使いたくなる活動というのは、よく耳にする「必要感のある言語活動」とは少し意を異にし、より主体的で自発的に児童が英語を使う様子が見られる活動である。本授業では、自分の夏休みを伝えたいという児童たちの工夫と積極的な姿勢が観察された。

第二の成果は、3人グループの役割設定の試みである。コミュニケーションの楽しさを感じながら、思う存分尋ね合うという方法がある。繰り返し使うことで、自然に上達していくことが可能であろう。一方で、間違ったまま何度も会話が続いていってしまう場合もある。会話を継続しながら、3人がそれぞれ「話す役」「聞く役」「見る役」を行いながら、会話を客観的に捉えることができる。「見る役」の児童は、観察してやり方を学んだり、客観的にやり取りを向上させるヒントを見つける機会とすることができる。グループでのコミュニケーションとしては、自然さに欠けるかもしれないが、言語習得を言語学習に変化させる一つの手立てであるともいえる。会話から少し距離をとる「見る役」になる機会は、言語使用をモニターする機会になる。「話す役」「聞く役」になっても、無意識に言語使用をモニターするコツが得られるのではないだろうか。学びのものさしは、少し離れた立ち位置を体験することで、学習者自身が捉えやすくなるものになるかもしれないと思われる。

◆課題について◆

改善可能な点の一つ目としては、教師の役割を補佐するタブレットの活用である。“Why not enjoyed?”や“What name is it mountain?”という発話が観察された。HRTとALTは机間指導をして、サポートしたり中間評価の時間で困ったことを全体で共有するなど、効果的な指導を実践していた。しかし、間違いや各児童が見つけたかった語彙や表現をすべてカバーすることは困難である。個別最適な学習を目指す意味でも、やり取りの最中での分からない語彙や表現、グループでの解決したい疑問などを、タブレットの音声入力を活用してその場で記録保存しておくことを提案する。「落ち着くって何て言うの？」と発話していた児童がいたが、この質問がタブレットに入力され、一斉集約されて中間評価で活用されれば、適切なタイミングでサポートされ(scaffolding)るかもしれない。表現や語彙の習得を促進させることができるであろう。学びのものさしという観点からも重要である。「分からないことを、分かりたいと思った段階で、答えが得られる」ことが可能になれば、表現意欲が増すと共に、自分自身の学習に責任をもとうとする態度も強くなると期待される。

二つ目は、場面設定の工夫である。本授業の場面設定は、お互いの夏休みをクラスメート同士で共有し、「6CのOur best summer vacation 30選」を作り、他のクラスに紹介するという単元計画であった。インフォメーション・ギャップという視点からすると、もう少し広がりを持たせることができると思う。日本の夏休みについて少しの情報しか持たない留学生やALTや海外の小学生に紹介するなどの設定をして、伝えたいという気持ちを強めることができるのではないかと思う。要は、インフォメーション・ギャップをどのように仕掛けるかということになる。「聞き手のニーズに応じて」ということなので、ニーズの異なる相手をいくつか用意して、相手のニーズに応じて伝える内容を変化させる仕掛けをすることもできたであろう。そうすることで、児童が使う語彙や表現も多様になり、学びも広がってくることになるだろう。

「学びのものさし」は、学習者が主体的に責任をもつために必要である。聞き手のニーズを意識して学びを豊かにする視点を生かし、その手立てをさらに工夫していく可能性をいくつも見出せたことから、本授業は有意義な提案授業であり、発展性があるといえる。2年次の研究が楽しみである。